

原態・古態といふこと

——「都落ち」をめぐる——(その一)

山下 宏 明

一、はじめに

わたくしは、ここ数年、『平家物語』の「読み」を、物語の完成形態である覚一本に即して進めている。それは、物語の(想定)原態⁽¹⁾本⁽²⁾當時から有したはずの、物語に潜在する物語の「力」が、この覚一本において顕在化したと考えるからに外ならない。さしあたって覚一本について課題とするのは、作品を構成する個々の物語——それは、いわゆる「句」のこともあり、プロット⁽³⁾を有する小さい部分のこともあるが、どのような物語としての推進力を有するかを探ることである。その意味で、ある一つのプロット「筋」と言ってもよい——の展開をめぐって、諸本の間でその順序に異なる場合、それは絶好の検討素材になるだろう。物語を分解することをわたくしは行いたくないけれども、物語を推し進める力を求めるための必要な作業として構成部分をとり出してみる。勿論それは、物語を構成する以前の単なる「部分」そのままでない。そしてこの抽出の作業も、これまで行われて来たような、「部分」の成り立ちを考えるための作業ではない。個々の

原態・古態といふこと(山下)

「部分」が、どのようなつながりを以てプロットを構成して行くかを探るために必要な作業である。分解をこととする素材論や成立論とは、さしあたって異なる課題である。

この作業を進めるのに、物語の内容からしても興味深いのが、覚一本で言えば巻七後半に属する、平家の都落ちを語る一連のプロットである。それは、諸本の間で、その展開順序に大きな異同があるからである。渥美かをる氏は、当道系⁽⁴⁾の諸本の外、非当道系の四部本・南都本・延慶本・長門本・源平盛衰記をとりあげ、それら諸本の間で、例のプロットのあり方、展開の順序に異なることを指摘した後

この中から忠度都落・東国大名、経政故郷を思ふ歌・肥後守のよ
うな、諸本により挿入位置の動く記事を除去する(同著296)

と作業を進める。そして諸本の間で順序に異なる部分を取り除き、残った、諸本の間で順序に異なる無い部分を、原態を示すものと推定する。すなわち、

残るのは「法皇↓主上↓維盛↓池大納言」の四人だけで、何れも
都落にとって重要人物ばかりである。(傍点、山下)

と言う。つまり、この四人を語る順序が原態当初のものであったと言

いたげである。ただ「重要人物」とするようには、ここにも渥美氏の物語の「読み」が背後に見えることを見のがせない。この四人を語る順序を以て原態と推定することには、この四人のみを語るのが物語の原態であったと言わねばならない。事実、渥美氏は、

従って原平家の都落はこの四人の記事で成り立ち、終部記事の落人名寄・福原仮泊・福原落に続いたことを推考する。

と言う。この氏の発言は、物語の原態(「原平家」の名称を、わたくしは採用しない)を四人の都落ちを語るものだったとする論と、「…福原落に続いた」とのかかわりが不明確で、「続いた」とする物語の部分が、後の加筆であるとするのかどうかもあいまいである。しかし、続いて、

一谷合戦(巻九)の場合、も原形を探索すれば、この場合と同様に主要人物数名に限られてしまうのである。

とするのであるから、やはり原態を、氏の言う重要人物を語る部分のみの簡略な物語であったと見るものと読める。事実、高木市之助^し氏は、一谷合戦の部分について、この渥美氏の推測を、

このような不動の序列をなす四つの部分……が、一谷合戦(後半)の「最も古い形」であろうと想像して行くのである。

と言う。言うまでもなく、ここ十年余りの非道系諸本をめぐって進めて来た原態・古態論から考えて、そのような簡略な原態本が存在したとの推測は成り立つまい。しかし、本稿は、この先学の推論を批判しようとするものではない。むしろ、このように多様な構成を示す諸

本の異同に、プロットの構成方法を探る手がかりを求めるものである。その際にまず手がけるべきことは、諸本の間に、かくも順序の異同があるにもかかわらず、その個々の異同の新旧を考える——これが、これまでのやり方だったのだが——ことよりも、むしろ異同の無い部分に注目すべきであろう。その一つが、

法皇の都脱出

から、

主上都落ち

への展開である。前の渥美氏が言う「法皇↓主上」のつながりである。

以下、諸本にわたって、そのプロットのあり方を探ることにより、物語の構成方法を考える。それは、間接的ながら、物語とは何かを考える一歩にもなるだろう。そして原態本を想定する一つの手がかりでもあるはずである。

二、複眼的な延慶本

まず延慶本の方法について検討する。

維盛は、都落ちに際し、前途多難なことを思い、妻子を都にとどめおくことにする。北の方の同行要請に続けて、時間の上では遡行する形で、この二人のなれそめを語る。それは、この都落ちの現場での維盛の妻子への思い入れ——この思い入れは、この後、維盛が入水をとげるまで維盛を苦しめることになる——を自然なものにするための話

りであり、単なる挿話ではないのだが、その後、

④1 廿四日亥時計ニ忍テ六ハラへ行幸ナル

しかし例よりも同行者も少く、あわただしかなかった。

④1 ある北面の下臈が院の御所、法住寺殿へ参り、小山田有重の語ったところだとして、平家に都落ちの計画のあることを告げ、内々心づもりされたいと言う。これを聞いた法皇は喜び、ことを他人に漏らすなと口封じをする。やがて下臈は退出する。

④2 其サヨ、フクル程ニ

宗盛が女院を訪ねる。院の御所から女院の居所（「建礼門院へ」とあるのみで、その場所はわからない）への場面の転換を「其サヨ」の指示語でつないでいる。宗盛は、世の先行きを見通し、一たん西国へ落ちようと思う。当然、その後へ源氏が入洛するであろうが、主上を同行すれば、洛中、源氏に与力する者は無く、源氏は浮き上ってしまつて、

其後、只昔、如、源氏ニテコソ候ワムスレハ其後主上ヲ都へ返入マ

ヒラセ候ヘキヨシ

との見通し、さらに万一にそなえて「儲君、為_レ宮ヲモ具シマヒラスヘク候」と、「ユシカタ行末ノ事共細ニ申給ケルホトニ」

④3 夜モアケカタニ成ニケリ

となるのであつた。続けて（と言うよりも、「一方」と言うべきか）

④2 同夜半ノスキサマニ

法皇は殿上の番を召す。この「同夜半ノスキサマニ」は、先行の宗盛の女院訪問「サヨフクル程ニ」とは時間的にほぼ同じ頃か、もしくは

原態・古態、ということ（山下）

やや後のことであろう。召し出した資時にはかつて法皇はひそかに脱出の手はずをととのえ、七条京極を北へ進み、二条京極で同行者を待ち、一条京極で忠須（糺か。一条京極とは、やや隔たるが）の明神を伏し拝み、

東白ムホトニ

から

④3 カクテヨノホノくトシケルホトニ

鞍馬寺へ入る。

④4 翌二十五日、平家の侍、秀康が院御所の異変に気づき、早速、

六波羅へ注進に及ぶ。時に、

大臣殿イマタ女院ノ御方ヨリ出給ワヌ程也

そこで秀康は女院の方へ参り、事を宗盛に報告する。驚いた宗盛が、早速、法住寺殿へかけつけ、

④5 院の失踪を確認する。

サルホトニ夜モアケヌ

となる。この「大臣殿イマタ女院ノ御方ヨリ出給ワヌ程也」は、前掲の④3「夜モアケカタニ成ニケリ」に続くものである。

以上を改めて物語の展開のままに列挙するならば、

④1 廿四日亥時計に主上、六波羅へ行幸。

④1 北面の下臈が平家の企てを法皇へ注進。

④2 「其サヨフクル程ニ」宗盛が女院を訪ねる。

④3 その中に夜も明け方になる。

- ② 「同夜半ノスキサマニ」法皇は脱出をはかる。
 ③ 夜明けに鞍馬寺へ入る。
 ④ 秀康が院御所の異変を六波羅へ注進。
 ⑤ 宗盛が法皇の失踪を確認する。
- の順序となるが、見るように、④の宗盛ら平家一門の動きと、⑤の法皇の動きらが併行して進む構成をなしている。これを改めて時間の経過のままに組みかえてみると、
- ① 主上、六波羅へ行幸。
 ② 下藪が法皇へ平家の企てを注進。
 ③ 深更、宗盛が女院を訪ねる。
 ④ 夜半過ぎに法皇、脱出をはかる。
 ⑤ 夜も明け方になる。③ 法皇、鞍馬入り。
 ⑥ 秀康が六波羅へ注進。
 ⑦ 宗盛が法皇の失踪を確認。
 ⑧ の経過となり、
- ③ の、宗盛が女院のもとに滞在した時点と、
 ③ の、法皇の鞍馬入り
 とが時間的に重なる以外は、ほぼ時間の経過のままに物語を進めている。この③と③との重なりは、宗盛ら平家一門の動きと、法皇の動きと、空間、視点の異なるプロットを一連の物語(叙事)にともに語り尽そうとするところから生じた現象に外ならない。
- 続けて、話は、法皇同行の企てが挫折した平家が、主上と神器を具

して七条を西へ、朱雀を南へ行幸あったことへと進む。改めて語り手の視点に即して簡単にふり返ると、

- ① 主上の六波羅行幸。
 ② 平家の計画を法皇が知る。
 ③ 宗盛が女院を訪ね、院内同行の心づもりを語る。

④ 法皇の脱出。

⑤ 平家、やむなく主上のみを具して都落ち。

の通り、二つの視点を併行させる形で展開している。それは、宗盛の側と法皇の側とのそれぞれのかけひき——この場合は、法皇の側が一步先んじたことになるのであるが——を語ることが、この二つの視点を複眼的にそなえることになったものである。宗盛らの動きをも突き放して対象化したといえる。むしろ、宗盛の企て、思わくを上廻る法皇を語ることにかなりの比重を置いているものと読みとれる。少くとも「法皇の都脱出」と「主上都落ち」とを対立的にとらえていると言える。

なお、延慶本は、この主上の行幸に関して、粗忽のため取り忘れた物の多いことを語り、

遷都ト俄ニアワタ、シク福原(行幸成)カ、ル事ノ有ニスル先表ナリ
 ケリト今コソ思食アワセラルレ

とした後、何者のしわざか、六波羅の惣門の前に、
 アツマヨリトモノヲ、カセフキクレハ西ヘカタフク平屋トソミル
 と落書のあったことを語る。「東より、頼朝の大風吹き来れば」と、

頼朝の威にたじろぐ平家(平屋)を冷笑するものであるが、これを語る語り手の視点は、ここでも平家を離れてこれを対象化し、関東の頼朝へ移っている。わたくしは、これまでに延慶本と頼朝のかかわりを指摘して来たが、ここにもその痕跡を見る。ただ、それは頼朝側からの視点で一貫しているといったものではなく、平家側への視点と併行して並列的であり、その意味で物語としての主題は拡散的である。そして、このような複眼的な、法皇への視点と頼朝への視点は同位のものとしてあるわけで、延慶本のこのあり方を「古態」とは言えても、「原態」とは言い難い。むしろ「増補」(加筆)への一階梯を踏み出したものと考ええる。

その位置付けは、今おくとしても、さしあたって延慶本に関する限り、法皇の脱出と主上都落ちとの連接、プロットの構成を、対立的な契機によって進めていることを見ることの方が、物語の方法を見る上では重要であるだろう。

三、単眼的な四部本

これが四部本⁽⁹⁾にあつては、二十四日に宗盛が建礼門院を訪ね、一たん九州への脱出を考えていることを語って、

来^レ方行末の事共申玉ふ程に夜モ明方ニ成りにけり

として、一たん叙述を切る。そして改めて、

同じき二十五日

と語り起こし、季康(延慶本では秀康)が法皇の失踪を知り、事を六

「原態」・「古態」ということ(山下)

波羅へ注進する。しかし宗盛が

女院の御所より未ダ出られずと申しければ

早速、「女院の御所」へ参つて事を告げる。あわてた宗盛が院御所の

法注寺殿を訪ね、法皇の失踪を確認する。この時点で、

面^ま程に夜も已に明けヌ

法皇の失踪を知つて洛中人々は迷い騒ぐ。ここで重ねて宗盛の思いに帰つて、

日來は法皇ノ御幸も成シ進センと支度シケルニ

とするのであるが、四部本では、これまでに宗盛に法皇同行の手はずのあつたことを語っていない。延慶本では、女院との対話の中に、この宗盛の心づもりを語っていたのであるが、四部本は、ここに突如、宗盛の日頃の心づもりを明かすことになる。言いかえれば、延慶本では、宗盛、女院の対話の場面と、法皇の脱出行との間に因果関係があるのだが、四部本ではこの両プロットが切れてしまっている。前に「一たん叙述を切る」としたことと見合っているわけである。法皇の動きについても、その動きそのものを語ることをしない。季康が事を察知したことを語ることによって、結果的に法皇の脱出していたことが判明するのである。勿論、法皇が平家の動きを察知していたとする語りもあるはずがない。

しかし一方で、この法皇の動きを語る視点を介在させないために、結果的に宗盛らの狼狽から主上ら一行の都落ちへはよどみなくつながることになっている。老若の武将が「皆ヨロヒテ」(原本に「皆喜ヒ

て」⁽¹⁰⁾とあるが、誤写であろう)、ただ時忠は、その出自が文官平家であることから「衣冠にて」供奉する。

以上、語り手の視点に注意しつつ四部本の構成をふり返ると、○宗盛が女院を訪ね、「叶はざらんまでも」筑紫の方へ落ちようと語る。

○そこへ季康が、法皇がいち早く脱出したことを報せる。
○やむなく宗盛らは主上のみを具して都落ちを執行する。

となり、語り手は宗盛と女院に視点をすえて語り続ける。一部、季康が法皇の行方を院中に探す個所があるが、これもその季康の、宗盛への報告へと収斂して行く。法皇の側の動きそのものに視点をすえて語るものではなく、結果的にその失踪を宗盛らが知ることになっていく。この構成では延慶本(長門本)のような、法皇と宗盛とのかけひきを語ることもあり得ない。法皇の失踪に途方にくれる宗盛を語ることに焦点を絞っているのである。しかも上述したように、宗盛、女院面談の場面と、法皇失踪判明を季康が知る場面との間には切れ目があり、この間にはプロットの因果関係が無く、その間は並列的なつなぎ方になっていた。実は、延慶本にあっても上述したところで、法皇が平家の動きを察知した場面から宗盛の女院訪問へのつなぎに、

其サヨフクル程^二

の「其」の指示語を挿入していたこと、この一語がかるうじてプロットをつないでいたことを思う時、これら一連の人々の動きを語るあり方は、並列的であるのが原態であろう。「原態」というのが言い過ぎ

であるならば、現存諸本から想像する「古態」であると言ってもよい。それを延慶本は、法皇への目配りをも行いつつ——これは頼朝に目配りしたことにも通じる。つまり平家に即するのではなく、平家をも対象化してとらえようとするもので、平家の物語からはみ出して行く——「其」の指示語を以てつないで行った。それが四部本では、本来の並列的な方法を残しつつ、視点を宗盛ら平家に固定した、いわば単眼的な方法を用いるものである。

この延慶本と四部本の形態をめぐって、あえて原態を推測するにしても、この両本の関係を、低次の本文批判によって決定し得ないことは言うまでもあるまい。視点が拮散的な——それだけ平家から離れる視点を持ち得る——延慶本に対し、平家一門に集約的な四部本の視点を見ることが出来る。低次批判で処理すべき現存の四部本と延慶本との関係はとにかくとして、両本の物語としてのあり方、視点のあり方のいずれに原態を想像するかになると、物語の主題を考える課題であり、文体を考える課題でもあるだろう。以下検討する南都本などに比べて四部本・延慶本はともに古態本である。中でもより完結性の濃い四部本のあり方に原態のおもかげを見る。それと、究極的には、南北朝の土壌の中で、平家に対する頼朝への目配りを重視した視点を設定し、やがて源平盛衰記へと拡散する物語生成の方向が存在したものであると思う。その芽生えは四部本にも、その頼朝拳兵を語る部分に見え、現存の四部本は、それを建礼門院をめぐる女院物語へと、これも増補の歩みを踏み出したものと見る。その意味で、四部本も原態本とは言

えない。原態本から、これら現存の増補本への生成は、何れも鎌倉政権の確立、それに宗教界の動きがあったため、きわめて力強く、急速なものであった。このような状況の中で、語り本としての当道座の本文の正本化も進んだはずである。

四、南都本の一部補修

南都本では、源氏が各方面から入浴を志す状況の中に、平家一門は、各地の固めの任を放棄して都へ集結する。その状況下に、

廿四日サ夜更^ニ程^ニ

宗盛が女院を訪ね

カナハサランマテモ院内ヲモ引具シ進セテ

西国へ落ちようと、その手はずを相談する中に、

夜^モ明方^ニ成ニケリ

二十五日（夜が明け切って以後を言うのであろう）、季康が法皇の失踪を知り六波羅へ馳せ参るが、上述のように宗盛は女院のもとへ参って不在のため、季康はその方へ参り事を報せる。驚いた宗盛が院御所の法住寺殿へ参り事態を確認する。平家は日頃の計画に挫折を来たし、やむなく

行幸ハカリヲモナシ奉覽トテ

一行の都落ちとなる。これをまとめると

○宗盛が女院を訪ね、院内を具しての西国落ちの心づもりを語る。

○しかし法皇はいち早く脱出していたことを知る。

原態^ノ・古態^ノということ（山下）

○やむなく行幸のみの都落ちとなる。

となり、全体は四部本同様に宗盛と女院の側のみから語りながら、法皇の動きは、事を知った季康の側のみから語る。ただしこの間、女院との対話に、宗盛の法皇同行の企てを語っているため、物語の流れとしては、四部本に見たような、唐突な感のする並列的な手法が目立たない。延慶本に見たような、法皇の動きそのものに即した語りを行わないため、この点でも四部本同様に視点の統一をはかっていることが指摘できる。プロットのあり方から見て、この南都本のあり方が四部本と同系統に属するものであることは確かであり、あえて物語のあり方としての新旧を想定するならば、これも単なる低次の本文批判を以て処理はできない。少くとも物語を読むわれわれの立場から見ると、法皇の行動・失踪を必然のものとするための、一部補筆を行ったものと見ることが可能であろう。

五、一門に同化する屋代本・覚一本の語り手

屋代本は、南都本同様に

同廿四日ノサ夜深ル程^ニ

宗盛が建礼門院を訪ねる。ここで注意したいのは、その建礼門院の居場所を

建礼門院ノ六波羅池殿ニ渡ラセ給ケルニ参テ

と明示していることである。ちなみに上述の古態諸本も女院の居場所を宗盛とは別にしてきた。すなわち、延慶本は、宗盛のそれを「六ハ

ラ」とし、女院のそれは明確ではないが別としているし、四部本・南都本も、宗盛のそれを六波羅、女院のそれを「女院の御所」と區別している。

当時、平家一門が、家族・郎等を含め六波羅の地に居住していたことは確実である。問題は女院の居場所であるが、卷三「御産」に女院は六波羅池殿を産所として皇子言仁(後の安德帝)がそこで生まれたとあり、『山槐記』の治承二年十一月十二日の御産の記録に「七仏薬師法結願了御壇所右兵衛督頼盛卿家也、号池殿者、御所南一町余也」とする『玉葉』の寿永二年一月一日の条に、年始の礼について兼実は、

次建礼門院拜礼六波羅

としているから、六波羅が主要な居住圏になっていたことは、何ら疑いの無いところである。とすれば、この都落ち当時も、この六波羅の邸地の、しかも池殿——この間の考証が必要であるのだが——であったのかも知れない。例えぼ村井康彦(11)氏は、六波羅周辺の図を揚げ、清盛の居宅を、その泉殿とし、すぐその南東に池殿を示しておられる。頼盛の母、池の禪尼とも関連があるうと思われ、詳細な究明が必要であるが、宗盛の住居を父清盛がいたとする泉殿、女院のそれを池殿と想定しよう。上述の古態諸本が、兩人の居所を別にしながら、近くにあったことを示唆する描きようをしていることも抵触しない。覚一本が、「六波羅殿」とするのも、池殿を指すものと考え得る。一般に記録的な面についてはより忠実な古態諸本が曖昧で、かえって当道系の諸本が明確であるのをいかに考えるべきか。当道系諸本の成り立ち

について、その背後に、非当道系の上記の古態本が存在した可能性の大きいことを考えれば、当道系の台本の制定に際して改めてこの具体的な明示を行った可能性はあるが、この間の事情については、なお保留する外ない。

とにかく屋代本において、宗盛は女院を訪ね、世のなりゆきを語つて、

院ヲ、モ内ヲモ取進テ西国ノ方ヘ

行幸、御幸をなそうと考えていることを語る。

一方、

法王ハ平家ノ取進テ西国ヘ落行ヘシト云事ヲ内々被聞召テヤ有ケ

ン

と、上述の女院と宗盛との対話の内容を受け、ここで、延慶本に見たように、

右馬頭資時斗ヲ御共ニテヒソカニ御所ヲ出サセ給テ鞍馬ノ方ヘ御幸成

と、法皇の側への視点をも見せる。しかし延慶本のような、複雑な時間間の雁行は見せていない。続いて季康が、この法皇の失踪を知って六波羅へ報告するのであるから、短文の、法皇に関する語りは、この季康の行動をひき出すためのきっかけをなすものと読みとれる。その意味で上述の南都本と同質の扱いをなすものと位置付けすることが可能である。宗盛は、早速、法住寺殿へ参り事を確認する。そこには、延慶本や四部本に見るような細かい時刻の指示をしないため、それら古

態本に見るような並列性を感じさせない。記録的な時の指示を行わな
い物語としての効果を見るべきであろう。細かに時の明示を行う非当
道系の記録性に比べる場合、時の明示よりも、人々の動きを主に語っ
て行く語り本のあり方を見ることが出来る。

続いて、二十五日の洛中の騒動、平家の不安を語って、

サリトテハ行幸斗成共成進ヨトテ

行幸の決行となる。

以上、

④ 宗盛、女院を訪ね、院、内を具して都を落ちる計画を語る。

⑤ 法皇、この平家の企てを知ってか、いち早く京都を抜け出す。

⑥ 平家、やむなく行幸のみを決行。

と展開する。宗盛ら平家一門の側に視点をすえ、一部、法皇の動きに
視点を移しながら、それをも、法皇に見捨てられた平家一門の不安を
語ることに収斂していると言える。その意味で、古態本、特に延慶本
や四部本に見たような並列的なあり方・各プロットの自立性が消滅
し、連続性を一層増している。

覚一本は、南都本・屋代本同様に、

同じき七月二十四日のさ夜ふけ方

と始め、宗盛は、上述した六波羅の、おそらく池殿に女院を訪ねる。

世の状況を語り、

院をも内をも取奉て、西国の方へ御幸行幸をも成し参せて見ばや

とこそ、思成て候へ、

原態・古態、と「うこと(山下)

と、その企てを語る。続いて法皇の動きへと視点を移すが、屋代本同
様に、

其夜法皇をば内内平家の奉り取て、都の外へ可_レ落行と云事を被_二
聞食てや在けん

と、上掲の女院と宗盛の対話内容を受けて、プロットの接続に無理が
無い。その法皇の動きも、季康の確認から、平家への通報につなが
り、法皇の失踪を報される宗盛の驚きへ収斂する点でも屋代本と変ら
ない。その意味で延慶本や四部本に見るような並列的な構成をも克服
している。法皇の失踪を確認した宗盛について、改めて、

日比は平家院をも内をも取参らせて、西国の方へ御幸行幸をも成
したてまつらんと被_二支度_一たりしに、かく打捨させ給ぬれば、

とするのも屋代本に同じである。平家一門の動きと、法皇の動きとの
両方に視点を分かった延慶本とは異なり、一たん法皇へ視点が移った
かに見える話を、「かく」法皇に見捨てられた平家の側へと収斂する
ための語りがこの一文である。法皇に見捨てられた宗盛ら一門の思い
を、

憑む木の本に雨のたまらぬ心地ぞせられける、

と語るのに、見て来たような平家一門に視点を集めようとする語り手
が、一門の身の上に同化した上での感情表現であり、そのような同化
の姿勢が

さりとは、行幸ばかりなりともなし参らせよ

の「さりとは」の接続語をひき出すことにもなるのである。

六、プロットの展開方法

以上、諸本を通して、法皇の脱出と、平家の主上を具しての都落ち
 決行を

法皇のいち早い脱出のため

平家、日頃の思わくがはずれ、やむなく、主上のみを具して行幸を
 決行する。

とのつながりとして読みとることができる。言いかえれば、法皇の脱
 出、失跡を、平家の主上行幸の契機とするというのが、物語のプロッ
 トである。

これを延慶本は

○下郎の通報により、法皇がいち早く宗盛の意図するところを察知し
 ていた。

○その法皇の側の動きを知らずに、宗盛は女院を訪ねる。

○その間に法皇は脱出を決行する。

の展開をたどり、語り手の視点が複眼的であること上述したところで
 ある。四部本は、この点、宗盛と女院の面談の場面でも、宗盛の内面
 に立ち入って行かない。南都本・屋代本・覚一本は、延慶本のように
 に、法皇の側に視点をはりつける複眼は有さないけれども、女院に語
 る宗盛のことばの中に、院、内同行の手はずを明かし、しかもこの宗
 盛のむねの内を法皇が察知していたとすることによって、法皇のいち
 早い脱出を語ることをも自然ならしめている。現実に琵琶法師が語り

手となった語りは、物語の展開に無理が無ければよいのであって、延
 慶本のように、法皇の内面にまで立ち入る必要は無いのである。四部
 本は、一部、並列的な構成を残しながら、話を宗盛ら平家一門の側か
 ら語ることで、複眼的な視点を以てする延慶本とは異質である。その
 意味で、四部本の祖形に延慶本の如き本文を想定して、四部本をそ
 の、量的な意味での略述とか抄出とすることは論理的にできない。南
 都本・屋代本・覚一本は、宗盛の女院との対話の内容に、法皇の脱出
 決行をひき出す契機を含ませることによって、四部本の生硬さを払拭
 したと言える。もともと、部分相互の間に牽引力を潜在させていな
 がら、それをさらに顕在化させ、部分相互の連接を緊密にするのが語り
 本のとったプロットの方法と言うべきであろう。

この場合、当道系語り本に比べて、延慶本と四部本は古態である。

原態については、改めてこの延慶本と四部本から究める外ないであ
 る。その判定は、結局、この場面に関する限り、延慶本の複眼的な視
 点をどう位置付けするかにかかっている。この複眼的な視点の成り立
 ちを考える一つの手がかりが、

(A) 維盛の妻子との離別を語るに際して、その北の方とのなれそめを
 語る。

(B) 廿四日亥時計「忍」六ハラへ行幸ナル

という、主上の動きを突如語り始めていること。

(C) さらに、これも突如、小山田有重が、宗盛らの企てを法皇に報せ
 たことを語っていること。特にこの有重の一件が、この後、法皇の

側に視点をすえて、その動きを詳しく語る複眼の契機をなしていることを注目したい。

この(A)(B)(C)の間に、物語を内から進めてゆく推進力を見出し難い。ということとは、これらを、物語が進み始めている、ある途中の段階で付加したと見るのが自然であろう。事は、低次の本文批判の域を越えている。それは文章論の課題である。平家一門の動きに寄り添って語る物語の文脈の中に他の文脈をわり込ませる、この延慶本の物語のあり方は、上述した六波羅の惣門の前に、頼朝の存在を高らかに宣言する落書を掲げたことを語るあり方と同一次元のものである。その意味で、この延慶本の複眼的な視点を「原態」とは言えない。

七、延慶本の主題論をめぐって

以上、「都落ち」の中、諸本の間で順序の異同の無い部分についても、その本文には微妙な違いがあり、各諸本の方法を見せていることを見て来た。今一か所、諸本の間で順序に異同の無いところがある。それは、妻子との別れを惜しんだ維盛が、平家一門の一行に合流し、一門の都落ちがととのう部分である。諸本の中、延慶本で維盛の合流を語る冒頭部分に本文の異同がある。すなわち、

サルホトニ大臣殿盛次ヲ召テ権亮三位中将殿何ニ問給ケレハ
 「盛次ヲ召テ」の一句である。これが、延慶本と近い関係にあると言う長門本に

三位中将はいかにととひ給ひければ、

「原態」・「古態」ということ(山下)

とあり、「盛次ヲ召テ」の句を見せない。それは、長門本の場合、この直前に頼盛の京都とどまりを語り、盛次が、頼盛に同行してひき返そうとする「さぶらひども」にせめて「矢一射かけてまいり候はんと申」したのを、宗盛が、

中／＼さなく共有なむ。とし比のぢうおんをわすれて、いづくにも落つかん所を見をくらずして、とどまるほどのものは、源氏とも心ゆるしせし。さほどのやつばらありとてもなに／＼かはせん。とかくいふに不レ及。

と言っていたからである。それを延慶本が例の一句を見せるのは、長門本のようにプロットが続かないからである。それに、延慶本においてこの盛次の、頼盛の家来に一矢射ようとする前に、頼盛が都に留まったわけを語りこの都落ちの場面から異次元の場面へと話が逸れたためである。すなわち、頼盛が留まったわけを、頼盛が清盛とは腹違いの兄弟であり、この兩人の間に、名刀抜丸の相伝をめぐる摩擦があり、ひいては宗盛との仲も不和であったという、一門内部の人間関係を語る。今一つ、一門と行動を共にしようとした頼盛の前に童が現れ、鳩を描いた扇を奉って消え去る。実は、この扇は白鳩の羽であり、それは八幡の示現で、

情此事案ニ頼朝世ヲ打取テ一天ヲ心ニ任トテ頼盛ヲ恩賞スヘキ瑞相
 有ラムト思給テ俄ニ恩留リ給ケルトソ聞ヘシ

とするのである。この八幡の支援を受ける頼朝への予祝は、その前の物語の文脈とはあまりにも異質であり、前の、六波羅の惣門の前に掲

げられた落書を語るのと同じ、頼朝が天下どりをして後の逆照射のプロットである。そして、このわり込みが、見るような、前後の文脈をつなぐための

盛次ヲ召テ

の一句を挿入させたものと考え。延慶本は、単に、伝承もしくは異文をよせ集めた本文ではない。少くともそれを編集しようとする意図を有するものである。生形貴重氏は、このような本文批判を「近代的」だとし、頼朝の背後にあった、ここでは八幡の神意に、モノガタリを進める冥衆の声を聞く。しかしこれは、とらえ方が逆ではあるまいか。頼朝の權威に、八幡の神童が奉仕していると見るべきであろう。頼朝の関東平定を、京の藤原氏に並ぶ、今一つの権力の確立が、『平家物語』の生成に、それまでの、当道系のモノガタリとは異質の展開を押し進めたことを、状況論に陥ることをもおそれずに指摘しないわけにゆかない。それは、物語の生成史上、物語の拡散を見せるもので、原態論の対象ではないし、古態論の対象でもない。生形氏の言う「廢帝物語」についても、原態本にその潜在的な基本構想があったとして、これに物語の生成の過程に、関東の政治的な判断を増幅していることを無視しては、歴史把握の上であまりを犯すことになりはしまいか。源平盛衰記に顕現するように、増補の過程は必ずあった。ことは、その増補を文学史的にいかに位置付けするかであろう。かくして、古態論は、やはり主題論にかかわってゆくし、文学史の重要な課題でもある。

注

- (1) 現実存在したはずの(おそらく現存しない)原本ではない。現存の諸本から想定する本文を指す。この「原態本」の課題については、別稿「原本・原態・古態」ということ——『平家物語』の場合——(未発表)に譲る。
- (2) 兵藤裕己氏の論考や生形貴重氏(『平家物語の基層と構造—水の神と物語』昭和59年十二月)が同様の見方を提起しているように思われる。
- (3) 本稿では、「一定の意味的秩序にしたがって按配された多くの個々の部分の総合」(竹内敏雄氏編『美学辞典』昭和36年十二月)の意に使用する。ゆなみに C. Hugh Holman の "A Hand book to Literature" The Bobbs-Merrill Company, Indianapolis, New York 1972 の "その意として" "the structural union of the parts" をあげたい。
- (4) 用語「語る」は、物語の展開を、作者の想定する語り手が進めることに由来する。『平家物語』を現実に琵琶法師が語ったことについては、別次元で考えるべきことである。くわしくは稿を改める。この表現の方法としての「語り手」を作者とすることが当たらないことは、現代の小説についても明らかである。
- (5) 『平家物語の基礎的研究』(昭和37年三月)
- (6) 諸本の分類名称については、拙著『平家物語の生成』(昭和59年一月)の「一、諸本の分類と古態の認定」に譲る。
- (7) 「中世展望—平家の窓から—」(『中世文学の世界』昭和35年三月所収)
- (8) 「軍記物語とA制度」(『日本文学』昭和58年二月)、「軍記物語の方法」再録)など。
- (9) 以下、四部本を訓読する。服部幸造・高山利弘両氏の労作による所が大まか。
- (10) 近く四部本の祖形の書写形式について詳細な調査がなされつつある。例えば谷口耕一氏「四部合戦本平家物語の素姓」(『語文論叢』11号 昭和58年九月)・早川厚一氏「四部合戦本平家物語真字表記論考」(『国語と

- 国文学』昭和59年九月)など。この場合も、その祖形に片仮名表記を想定しないと説明がつかまい。
- (11) 『平家物語の世界』(昭和48年四月)
- (12) 時枝誠記氏(『日本文法 口語篇』昭和25年九月)は、「それ自身一の統一された全体」であると言い、この統一をくずすものを合作によるものとする(「平家物語の異本成立の過程に対する一考察―表現における合作の理論に基づいて―」(『国語研究』昭和33年十一月)と云う)。
- (13) 岡山大学蔵本(昭和52年三月刊)による。適宜、濁点を付す。
- (14) このような延慶本の加筆は、聖書学の本文批判の方法を有効に活用した武久堅氏の一連の論考(例えば「伝承部と著述部―延慶本平家物語成立過程考―」(『国語と国文学』昭和49年一月)の指摘するところである)。
- (15) 『平家物語の生成』四の5「逆照射の方法」
- (16) 「平家物語の構想・試論―延慶本『平家物語』得長寿院説話をめぐって―」(『日本文学』昭和59年九月)。氏の「近代的」と称する所以は、氏が永年の落人伝説・盲僧伝承にかかわる踏査からえられた、物語を異界からのモノガタリとする、ユニークな「平家」論が支えていることは、別に評価すべきであろう。
- (17) 「『平家物語』の構想試論―廢帝物語と、神々の加護と放逐の構想、延慶本を中心として―」(『日本文学』昭和59年四月)